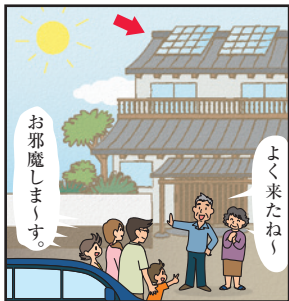
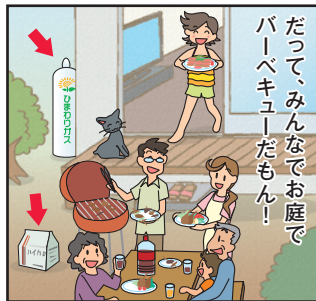


いつもありがとう

第8回作文コンクール 入賞作品集

2014

〈選者〉あさのあつこ／森田正光／小島奈津子／崎村忠士／白石収



「いつもありがとう」作文コンクール共催企業

SINANEN ミライフ

ひまわりガス シナネングループ各社

シナネン株式会社 東京都港区海岸一丁目4番22号 <http://www.sinanen.com/>

みんなの身近で暮らしをサポート！

いつもありがとうございます 第八回作文コンクール入賞作品集(2014) もくじ

先生方のお言葉……………3

あさのあつこ(作家)

森田 正光(気象予報士)

小島 奈津子(フリーアナウンサー)

崎村 忠士(シナネン株式会社)

白石 収(朝日小学生新聞)

最優秀賞

私の中のかいじゆう

山本 花奈……………4

シナネン賞

パパ、いつもありがとうございます

木下 渚……………6

ミライフ賞

かける五

平田 つぶら……………8

朝日小学生新聞賞

かいじゆうとぼく

浪崎 琥央……………10

優秀賞

〈低学年の部3編〉

ありがとう

松木 皇君……………12

パパが歩いていること

山口 愛結……………14

あたりまえにありがとうございます

吉永 崇大……………16

〈高学年の部3編〉

兄弟つていいな

川口 晴輝……………18

お手紙

森 愛葉音……………20

お兄ちゃん かっこいい

高崎 利基……………22

団体賞(5団体)

【群馬県】 高崎市立六郷小学校

【愛知県】 扶桑町立柏森小学校

【愛知県】 扶桑町立扶桑東小学校

【大阪府】 大阪市立島屋小学校

【広島県】 東広島市立川上小学校

主催…朝日学生新聞社

共催…シナネングループ

後援…文部科学省 朝日新聞社

●応募総数三三三、一三一作品の中から選ばれました。

先生方のお言葉

あさのあつこ「作家」

いろいろな選考会の審査員をしています。このコンクールが一番いやです。なぜなら、選ぶのが苦しいからです。選考ルール上、作品の評価をしています。どれも仮のもの。どれも素晴らしい出来ばえです。ちゃんとした子どもの周りには、ちゃんとした大人たちがついて支えているのだと実感します。そして、日本中の子どもたちが、作文の中の子どもたちのように「いつもありがとうございます」と言える社会になってほしいと思います。

もりた まさみ「気象予報士」

第一回から審査員をしています。最初のことと比べると文章の技巧が格段に良くなっています。続けていくうちに、応募作品の全体としてレベルが上がってきていると感じます。また、どの作品も独自の体験を自分の中で再構築して、上質なストーリーとして仕上がっていると思います。来年は、技巧に加えて、子ども本来の無邪気さ、素直さ、あどけなさを表した作品もたくさん寄せしてほしいです。

こじま なつこ「フリーアナウンサー」

審査員になって2回目になりますが、毎回私が子どもたちに試されている気がします。心に響いた作品を選ぶのはもちろんですが、子どもの気持ちになって選びまし

た。すると、「大人って、こういうときにはこんな対応をするのか」と発見がありました。入賞した作品はどれも文章の参考になるものばかり。全国の子どもたちが、このコンクールにふれてもらうことで、もっといい作文が増えてほしいですね。

崎村 忠士「シナネン株式会社」

入賞するしないにかかわらず、すばらしい作品ばかりで今回の選考もとても悩みました。読んでいて感じたのは、客観的に自分や物事を見られる小学生が増えてきている、ということ。反抗心など、人間ならば誰もが持っている欠点を独自の感性で見つめ、考え、結論を導く。それを子どもが文章で表すと、プラスの方向性に変わっているのです。この発想力には驚かされます。作品を読むたびに勉強させてもらっています。

白石 収「朝日小学生新聞」

作品すべてにやさしさがあふれていました。ご両親やきょうだい、おじいちゃん、おばあちゃんとの絆やあなたかな支えに気づき、そして感謝の気持ちで振り返ることができるすばらしいコンクールだと、作品を読みながら感動しました。「ありがとう」「はみんなを幸せにするエネルギーなんです。私もすごく幸せになりました。」

(順不同敬称略)

私の中のかいじゅう

山本花奈やまもと はな

お母さんありがとう。私の中の小さなかいじゅうを、あたたく見守ってくれて。私の心の中には、小さなかいじゅうがいます。普段はおとなしくしているけれど、しかられると、とつ然大きくなってあばれだします。そしてお母さんを困らせて、またよけいにかかられます。

例えば、弟とけんかした時、お手伝いをさぼった時、ついだらだらしてしまった時に、しかられます。私はそんなに怒らなくてもいいのに、と思いつい口ごたえしたり、たまに、泣いて大きわざしてしまいます。悔しくて、悲しくて、もつと分かってほしいのに、と思います。時に、足をドンドンとふみならして、お母さんなんて大きらい！とまで、思ってしまうんです。でも本当は、お母さんのことが大好きで、言うことも聞きたいです。しかられていっばい反こうした後は、さびしくて、胸が何かにギョツとしめつけられたような気持ちになります。あんなこと言わなければよかった、と後悔します。

どうしてだろう。どうして自分の気持ちをおさえられないのかな。お母さんのことが大好きなのに、どうして困らせてしまうのかな。私かなやんでいると、お母さんが言いました。

「あのね、花奈の中には小さなかいじゅうが住んでいるんだよ。納得がいけないことがあると、すぐにあばれだすんだよ。でも、悪いかいじゅうではないよ。心が成長するのに必要なかいじゅうなんだよ。誰の中にもいるし、実はね、お母さんもまだこっそり飼っているのよ。」

私はなるほど、と思いました。そして、もしかしたら、心の中で飼っているかいじゅうは、体が大きくなるにつれて小さくなるのかな、と考えました。私はお母さんに言いました。

「でもさ、花奈のかいじゅうは、同じ年の友達よりも、少し大きめかもしれないね。」

それを聞いてお母さんは、大笑いしました。そして、「花奈の中のかいじゅうも、好きだよ。」

と言ってくれました。私はほっとしました。たくさん反こうするのは、悪い子がすることだと心配になったけど、かいじゅうがいるのはおかしなことじゃないんだ、と分かったからです。

でも私は、できるだけかいじゅうにあばれてほしくないです。好きな本をじっくり読んだり、家族とたくさんおしゃべりしたり、愛犬と遊んだりすると、おとなしいままでいてくれることに気づきました。

私のかいじゅうは時々やっかいだけれども、どうやら長い付き合いになりそうだから、ずっと仲良くして行きたいです。

お母さんありがとう。私の小さなかいじゅうに気付いてくれて、好きだと言ってくれて、本当にありがとう。

パパ、いつもありがとう

木下 渚きのした なぎさ

私は五才から家で勉強しています。台所のテーブルで、イスの上に座布団を何枚も置いていました。まだ小さかった私は、そうしないと、テーブルにとどかなかったからです。その時、パパは、「よし、なっちゃんのために、タバコをやめよう。勉強机を買うためにお金をためよう。」と言いました。

「わあ、私だけの机、いいなあ！」私はとびはねました。うちのパパは、病気で片足を切断し、ほかのパパみたいに働けませんでした。大きい買い物は、大変でした。

「タバコをやめよう。」と言ってから、パパはよくつまようじをかんでいました。

「パパ、つまようじって、あまいの？おいしいの？」と私は聞いたら、

「パパは、タバコをすいたいけど、がまんしてるんだよ。なっちゃんのためにね」とママが言いました。

小学生になる前の三月のことです。

ある日、パパは、「明日、勉強机を買いに行こう。パパからの入学プレゼントだ。」と言いました。

「やった！」私は大喜びでした。一晚中ねむれませんでした。

次の日、パパはぎ足をはめて、ママと三人で出かけました。

家具屋さんで、たくさんの勉強机を見て、どれもピカピカでした。私は、照明がついている、ブラウンのを選びました。机の上にジェルのマット。下にピンクのハートのじゅうたん。調節できるブルーのイス。本棚もセット。

こんなすばらしい入学プレゼントなんて、すごくない？

でも面白い物のあと、そんなにたたないうちに、パパは入院しました。

四月、私は一年生になりました。毎日、勉強机で宿題して、ドリルもしました。学校で百点を取ったテストを、その机のひき出しに入れました。パパ、早く退院してほしいなあ、と日記帳に書きました。退院したら、私の百点を全部パパに見せたいから。

でも、パパは黒いわくの中の写真になって帰ってきました。

今、私は五年生です。机の上に、パパの写真を置いています。毎日、パパは写真の中から、私の勉強の姿を見て、ニコニコ笑っています。私は、百点のテストを見せる時、「いいなあ、なっちゃん。よくがんばったねえ。」とパパがいつもほめてくれる気がします。私は、休けいの時、学校の事や家の事を全部パパに言います。パパは、やさしいから、私の話を全部聞いてくれます。

「パパ、勉強机を買ってくれてありがとう。パパ、大好き！」

かける五

平田 つぶらひらた

「ラジオ体そうカード早くとってこい。」
「今すぐ虫カゴとセミとりあみもってきて。」

今日もまためいれいです。私は5人兄弟の末っ子なので、姉ちゃん兄ちゃんたちに、毎日いろいろたのまれます。おしつけられていやな気もちになり、たまに泣くこともあります。一つの子どもべやを皆でつかうため、せまくてうるさいし、トイレはじゅんばん、お風呂だってゆっくり入れません。ねむっている時はねぞうがわるい人にふまれたり、けられたりします。共ばたらきでかぞくがたくさんいると、お手伝いは分担しないと大へんです。一人がさぼると皆にめいわくをかけるので、責にん重大だし、やくそくや時間を守ることは当り前で、ケンカもがまんが多いです。だから何もしいない、何でも買ってもらえる一人っ子はいいなーってずっと思っていました。でも、この前アルバムで私の赤ちゃんのころのしゃしんを見ました。姉ちゃんや兄ちゃんたちにだっこされている私、あそんだり、ごはんを食べさせてもらっているのもあります。皆楽しそうにわらっているし、私もうれしそうです。ぜんぜんおぼえていないけど、大じにされているのが伝わりました。ふくはお下がりはかりだけど、私のおきに入りのき地で、お母

さんはぼう子やカバンを作ってくれます。お父さんはしゆくだいを教えてくれるし、姉ちゃんは毎週末に私のくつと上ばきをきれいに洗ってくれます。兄ちゃんたちも米洗いや洗たくほし当番を手伝ってくれるし、私がインフルエンザになった時、
「おれたちにうつすなよ。」

って言いながらも、そばで本を読んでくれたり、食べたいプリンを買ってきてくれました。本当は皆、私のことが好きなのかもしれないし、私は一人っ子にアコがれていたけど、一人っ子は全ぶ一人ですからもっと大へんです。でも、私は協力やたすけ合うことができる兄弟がいるので、もしかしたら楽しんでいるのかもって考えるようになりました。お父さんお母さんはよく、

「子どもは宝」

といい、私たちが大切に財さんだそうです。そんなに言われると、あたたかいきもちになつてうれしさがあふれます。きのう、かけ算をならいました。かける五は五倍のこと、いいこともわるいことも五倍になる私たち兄弟。かぞくでも言わないと伝わらなかったり、ゆずり合わないキズつけることもあります。だけど、だれかに何かあったら皆で知えを出してかいつします。むずかしいとか困ったことは、わらって吹きとばすたくましきもあります。全ぶ五倍。私はそんなかぞくが大好きです。それはとてもさういこうにしあわせなことです。めいれいされるのはやっぱいいやだけど、ちよつとのおねがいならきいてもいいかな・・・。

かいじゅうとぼく

浪崎 琥央なみざき こ

二年前の夏、ぼくにはいもうとができました。ずっと、おとうともいもうともいらないって思っていたから、お父さんにきいたとき、うれしうなんて思えなかったです。ぼくは、お父さんもおかあさんも、大すきだから、赤ちゃんなんかにとられたくないって、ぼくだけでいいのになって思いました。

おかあさんは、ずっとトイレではいてるのに、おなかをさわってうれしそうにしてるし、ぼくの手をにぎって「お兄ちゃんが、いい子いい子してくれてるよ。うれしいね。」って話しかけてても、なんだかやっぱりうれいって思えませんでした。

ある日、おかあさんが「いっしょにびょういんへいこう。」と言ったので、ついていくことにしました。おなかにきかいをあてると、「トットトットトット」と音がきこえてきました。ぼくはビックリして、おかあさんの手をぎゅつとにぎりました。パソコンみたいなきかいに、小さな赤ちゃんがうつりました。先生が、手と足、かおと体をおしえてくれて、「今日はよくうごいてるなあ。お兄ちゃんがいるからよこんでるのかな。」とぼくに言ったけど、ぼくは小さな赤ちゃんにむ中で、へんじができませんでした。

おかあさんのおなかが、すごく大きくなって、さわると赤ちゃんがパンチやキックをします。ぼくは赤ちゃんを「こっちゃん」とよんでいました。

八月二日の朝、お父さんにおこされて、三人でびょういんへ行きました。おかあさんはずつといたいってうなっていました。ぼくは、おかあさんがなかないか、すごく心ばいでした。ちがうへやへ、おかあさんが行くとき、「こっちゃんにやつと会えるよ。まってね。」と言いました。しばらくまっけると、赤ちゃんのなくこえがして、かんごしさんがこっちゃんをつれてきてくれました。まっ赤なかおでずつとないてるこっちゃんは、テレビや絵本で見たことのある赤ちゃんより、ずつとへんなかおしていたけど、ぼくはかわいいって思いました。

こっちゃんは、かいじゅうです。ぼくの大切なものもこわすし、らくがきもします。ぼくがアそんでいるものも、すぐとりにきます。かいじゅうは、すぐつよいからぼくは、まけてしまいます。たまにやりかえすと、ぼくがおかあさんにおこられます。おかしいと思うけど、これがお兄ちゃんのしごとなんだってぼくは知っています。お父さんもおかあさんも、いつもぼくが一番すきって言うから、ぼくはお兄ちゃんががんばれます。

かいじゅうは、ぼくのことが一番すきっていつも言います。何回きいても、ぼくです。ぼくはそれをきくと、すぐくうれしくなって「ありがとう」ってこたえます。こっちゃんのお兄ちゃんにしてくれて、ありがとう。

ありがとう

松木 皇君

「だいすきなたいこをたたきたい。」

ぼくは、ちいさいころから、きりしまくめんだいこがすきになりすぎて、たたくところをみるだけじゃなくて、じぶんでもたたきたくなくなって、はじめのころはおもちゃのたいこをたたいていました。きいたりみたりしてくめんだいこのきよくをしせんとおぼえてきました。

まいにちたたいていたらおもちゃのたいこはこわれてしまいました。

それからは、みるくのかんやびあののいすをたいこのようにたたいていました。

えんそうをききにいつては、まえにおぼえたところのつぎをちゃんとおぼえてかえろうといっしょうけんめいみました。

そしたら、たくさんたたけるようになりました。

まわりのひとたちやおともだちから、「しょうがっこうはどこにいくの。」ときかれるようになりました。

ぼくは、「たいこがたたけるがっこうにいくんだ」と、いつていました。

そしたら、くめんだいこのひとたちがしょうがっこうでおしえてくれるということをしりました。

しりました。

だから、ぼくはたいこがたたけるがっこうがあつてくめんだいこのひとたちがおしえてくれるというのでぜったいにそのがっこうにいきたいとおもうようになりました。

だけど、そうするためにはひっこさなければいけないというおおきなもんだいがありました。

ぼくは、おとうさんとおかあさんに、じぶんのおもっていることをつたえてみました。

それから、ごはんをたべているときやくるまにのっているときにそのはなしをたくさんするようになりました。

ほいくえんをそつえんするまでにはひっこさないといけなかったからやすみのひにふどうさんやさんにいつておうちをみてまわりました。

そしてやつとおうちがきまりました。

ことしの4がつからたいこがたたけてくめんだいこのひとたちがおしえてくれるたちちほしようがっこうにかよっています。

ぼくのはなしをきいてくれてひっこしてくれてたいこのおうえんをしてくれるおとうさんおかあさんにいつぱいのありがとうをいいたいとおもいます。

なつやすみのさいごにたいこまつりでたいこをたたくときにありがとうのおもいをたくさんこめてたたきたいとおもいます。

いつもありがとう。

パパが歩いていること

山やま口ぐち 愛あ結ゆづ

きよ年の父の日のことはぜったい一生わすれられません。

「パパが今日、二回もころんだんだって。何だろうね。とにかく、いそいでかえるよ。」
母が言いました。

いえにかえると、父はふとんにあおむけになっていて、こう言いました。

「うごけなくなっちゃった。」

母はびょういんにでん話をして、父をかついで車にのせました。わたしはだまってついていきました。

あとからおねえちゃんがびょういんにかけつけましたが、そのときはもう、父はだらんとしていました。おねえちゃんとわたしはタクシーでいえにかえって、父と母はきゆうきゆう車でほかのびょういんへ行きました。

「のうこうそく」というびょう気でした。

母はそのとき、おいしゃさんから、

「さいあくの場合(しぬこと)も考えておいてください。」

「もしなおっても車いす。どんなにがんばってもつえはのこりますよ。」

と言われていたそうです。

母はわたしたちが学校にいつている間、何ども大きな声で泣いていたそうです。

さいしょは、お見まいに行っても、父は赤ちゃんみたいに何もしゃべらないし、わたしがよんでもこつちをむくこともできませんでした。それでも、わたしたちは父の手や足をさすりました。何もかんじないらしいけれど、一生けんめいさすりました。

父はだんだん元気になってきました。ある日ゆびがうごいて、ある日すわれるようになって、ある日、立てるようにになりました。そして、とうとうある日、父は、つえにたよりながら、ゆっくりゆっくり歩けるようになりました。

一年たった今。父のつえは下駄箱のおくにしまったままです。それどころか毎朝近所の遊歩道を走っています。電車にのってしごとへ行きます。わたしをだっこしてくれます。

「次は、かた車が目ひょうなんだ。」

「かぞくをおいて、しぬわけにいかないよ。」
と、父はにこにこわらいます。

その「思い」で、苦しいリハビリをがんばってくれたと思うと、心のそこから父に「ありがとう」を言いたいです。

それに、あきらめないでがんばったら何でもできるということ、証明してくれました。歩くことや話すことはあたり前ではなくて、すてきな「きせき」なんだということも教えてくださいました。

ありがとう、パパ。パパ、ありがとう。

あたりまえにありがとう

よしなが
吉永 崇大そうた

夏休み十日目。今日もいつもと同じ朝がやってきた。目がさめて顔をあらう。いつもより少しおそい朝ごはんを食べると、大会が間近となった水泳部の練習にそなえて、道ぐのじゅんびをする。夏の暑さには、キンキンにひえたお茶がせつ対にひつよう。水を入れると、お茶を水とうにながしこむ。じゅんびはととのった。いやその前に弟と妹の世話もわすれずに…。

そう。今日はいつもととはちがう。ふだんのぼくはこんなことはしない。と言うのも、今朝は、お父さんもお母さんもない。きのうの夜、お母さんのぐ合がわるくなって、きゅうきゅうのびょういんに行っているからだ。

「だいじょうぶ。すぐに帰ってくるから。ばあちゃんが来てくれるからね。」

そう言っ、お父さんとお母さんはびょういんに向かった。お母さんのことが心ばいな気持ちも、自分たちだけでだいじょうぶなのかというふあんもあつたけど、ぼくは「自分がなんとかしなきゃ。」という気持ちにすっかり切りかえていた。

そして、じゅんびをしながら、いろんなことを思い出そうとしていた。部活が終わって帰ったら、いつもお母さんせんたくを終わらせていたな。そうじをして、昼ごはんのじゅ

んびをして、ぼくたちが食べ終わると、弟や妹をお出かけにつれて行つてた。まずは、そこまです。さあ、何からしよう。ぼくに何ができるんだろう。あれこれ思い出しながらお母さんのことをいろいろ考えた。「夏休みに入って、大へんだつたんだな。」「ぼくたちのためには無理してたのかな。」「ぼくの中を、いろんな思いがかけめぐる。いつもぼくたちのためにはたらくてくれているお母さん。毎日ぼくたちのリクエストを聞いて、食事のメニューを考えてくれる。帰るとげんかんで出むかえてくれて、学校に行く時は、ぼくを元気づけようと声をかけ、見えなくなるまで手をふってくれる。毎日くり返される同じこと。あたりまえにやってくる毎日、ぼくの周りにはあたりまえのようにみんながいる。でも、それは、本当はあたりまえじゃない。ぼくはお母さんやお父さん、そして弟と妹の家ぞくみんなに支えられている。そのあたりまえがどれほど素晴らしいことなのか、この夏、ぼくは気づいた。そして、そんなみんなの思いを大切にしなければいけないということも。

部活に出かけようとした、ちょうどその時お父さんの車が帰ってきた。お母さんは、やっぱりしんどそうだったけど、点てきをして少し顔色もよくなり、

「だいじょうぶよ。心ばいさせたね。」

とわらって言った。

「行つてきます。」

いつもと同じ朝。ぼくは、いつもより大きな声で部活に出かけた。

兄弟っていいな

川口 晴輝かわぐち はるき

ぼくには、四才はなれた妹がいる。妹が生まれるまでは、兄弟がうらやましく思っていた。ぼくも、兄弟がほしかった。

ある日、お母さんと一緒にねると、トクントクンと聞こえたんだ。目をさますと、何も音はしない。またねると、小さな丸が見えたんだ。その中でトクントクンと聞こえる。何でか、赤ちゃんだと思ったんだ。

次の日、朝一番に「赤ちゃんいるよ。今、これくらい。」と指で小さな丸を作ってお母さんに知らせた。お母さんは笑って何も言わなかったけど、夕方ビクリ顔をしたお母さんが「赤ちゃんできてた。」と言った。ぼくはうれしかったし、はずかしかった。

ぼくは、よく赤ちゃんの夢を見た。丸の中で、だんだん大きくなる赤ちゃん。かわいい女の子。だけど、お母さんが言ったんだ。「なかなかチンチン見せてくれないから、男の子か女の子かわからない。」って。だからぼくは教えた。「女の子だよ」って。

しばらくして、赤ちゃんは女の子だった。ぼくが話せば、お腹をけって返事をしてくれる。ぼくがお腹をさわると、ポコポコ動く。そんな元気な妹が生まれ、ぼくは、お兄ちゃんになった。

妹が生まれた一年後、またトクントクンと聞こえたんだ。次は元気な男の子。とんでもなく大きく成長した弟が生まれた日、ぼくは二人のお兄ちゃんになった。

お兄ちゃんになってから、ぼくのジゴクの日々が始まった。何でも後回しにされ、あまり相手にされなくなった。すぐに、「お兄ちゃんなんだから。」と言われる。でもね、ぼくまだ子供なんだよ。だから、たまにはあまえないんだ。

妹と弟が大きくなると、ぼくは二人のおモチャになってしまった。たたかれたり、かみの毛をひっぱられたりする。はじめはいたくて泣いたんだ。だけど、それを見て笑う二人の笑顔がかわいくて、がんばってしまふ。そしていつの間にか、やさしいお兄ちゃんになってしまった。

妹と弟が生まれて、ぼくは二人がいらないと思った事もあった。だけど、今は三人一組。何するにも、どこ行くにも、三人一組。そしてぼくが先頭に立つ。

兄弟って意外といいな。ぼくをお兄ちゃんにしてくれた妹と弟に、ありがとう。

お手紙

森^{もり}愛^あ菓^か音^ね

わたしには、さつま川内市におじいちゃんが一人で住んでいます。なぜかという、二年前におばあちゃんが亡くなったからです。わたしは、おばあちゃんが亡くなる前まで、お手紙の交かんをしていました。その場所はトイレです。さつま川内に行くたびにわたしはおばあちゃんとお手紙の交かんをしていたのです。その理由は、おじいちゃんとおばあちゃんとは、昔から短歌を作る人たちだったので家の中のいろいろな所に白い紙が置いてありました。おじいちゃんとおばあちゃんは、何かひらめいたら紙に書くようにしていたようです。トイレにも紙が置いてあったので、わたしはまねをしてみたくなりその紙に、

「トイレの神様は、いるんですか。」

と、書きました。すると次にトイレに行ってみると、

「神様はいますよ。」

と、返事が書いてありました。わたしは、とってもびっくりしました。わたしは、

「本当に神様がいるのかなー。」

と、思いました。わたしは、とっても楽しくなり、すぐ返事を書いてみようと思い、

「だれが返事を書いてくれたのですか。」

と、書いてみました。すると、

「かわいい森愛菓音様、森しづ子と申します。」

と、書いてあったので、

「なんだ、おばあちゃんだったんだ。」

と思いました。

わたしは、トイレの神様がおばあちゃんと分かった後も、さつま川内の家に行くと、必ずトイレの紙にお手紙を書いて、返事を読む事を楽しみにしていました。

それから、三か月くらいすぎたころに、おばあちゃんの病気が分かり、わたしが二年生になった四月に、亡くなりました。わたしはおそう式の日にも、

「おばあちゃんが天国でゆっくり休めるように。」

と、書きました。すると、おばあちゃんは、亡くなったはずなのに、

「ゆっくり休みながら見守っていますよ。」

と、返事が書いてありました。その返事を書いてくれた神様は、いつもおばあちゃんとの手紙のやり取りを見てくれていた、おじいちゃんでした。

最初は、なぜ白い紙がトイレにおいてあるか分からないままで書いた手紙だったけど、わたしが書いたのがきっかけで、手紙のやり取りがたくさんおばあちゃんとできてよかったです。今ではおじいちゃんと手紙のやり取りをしています。今、天国にいるおばあちゃんともやり取りをしたいと思っています。けれども、もうできないので、心の中で、やり取りをしていきたいです。今、おじいちゃんと手紙のやり取りは、うれしかった事、楽しかった事を伝えて、みんなで楽しんでます。

「お手紙のやり取りをしてくれてありがとう。」

お兄ちゃん かつこい

高崎 利基

『お兄ちゃんは、バカだ。』

ぼくは、ずっと、そう思ってきた。イメージ的には、『ありとぎりぎりす』というお話のきりぎりす。何の努力もしないで、やりたいこと、楽しいことばかりして気楽に生きている。勉強している姿なんて、ほとんど見たことがない。そんな高校生の兄にお説教される日が来るなんて、考えたこともなかった。

それは、今年の夏休み。ぼくが、英語の予習をしているときのことだった。CDを聞きながら発音練習をしているぼくに、母が、

「そんな棒読みじゃなくて、抑揚をつけて。」
と言った。

「抑揚って何？」

「強弱をつけて読むんだよ。」

「強弱って？」

「調子を上げたり下げたり……。とにかく、CDのまねして、歌うみたいにするの。」
だんだんいらだたせてくる母。

「わかんないよ。できないよ。」

ぼくは、大声でさけぶと泣き出した。

兄は、すぐ二階から下りてきてくれた。

「利基。今習っている英語は、基本中の基本。だいじょうぶ。すぐ、できるから。」
兄は、めずらしく真面目な顔で言った。それからいつものおどけた兄になり、教え始めた。

「英語なんて、のりのりで言っちゃえばいいんだよ。ハローハロー。マイネイムイズ・トオシイキイ。『トシキ』じゃなくて、『トオシイキイ』だよ。オッケー？」
ひよっとこみたいな表情の兄。ぼくは、思わずふき出してしまった。そして、

「トオシイキイ。トオシイキイ。オッケー？」
とやってみた。ふざけて言っただけなのに、

「すっげえ。ちゃんとできるじゃん。完ぺき。」
兄は、大げさにほめてくれた。

兄と英語を勉強するのは楽しかった。まるで、まんざいでもやっているようだった。そして、ぼくは、英語が上手になった気がしてうれしかった。

「お兄ちゃん、英語できたんだね。」

「おいおい。本当に、ただのバカだと思っていたのか。ちよつと待ってる。」

兄は、二階から、小さな袋を持ってきた。中から出てきたのは、ポロポロになった単語カードだった。きたない字で書いてあるのが、兄らしい。少しの沈黙の後、兄が言った。

「利基。いいか、よく聞けよ。完ぺきじゃなくていいんだ。全部できなくてもいいんだよ。でも、やるって決めたことは、ちゃんと頑張らなくちゃだめだ。それから、男は、人が見えない所で努力をするもんだ。」

「お兄ちゃん、かつこい。」

思わず言葉がこぼれた。今までに見たことのない、すごくかつこい兄だったのだ。ぼくは、大好きだった兄がますます好きになった。

お兄ちゃん、いつもありがとう。大好きだよ。これからも、ずっとずっと、よろしくね。